

おむつを選ぶ

近江由伊

私の勤務している保育園の乳児クラス（〇〜二歳児）では、育児担当制の方法をとっています。担当保育者が、育児（食事、排泄、着脱など）において、クラスの中でも、同じ子どもに継続してかわるようになっています。今回、「着替える」というテーマをいただき、真っ先に思いついたのが、私が四月から担当している二歳児のAという男の子です。Aはおむつを選ぶということを始めたのです。

Aとの出会い

Aと初めて出会った時の印象は人懐こく、穏やか

なことでした。その一方で自分から甘える姿が見られずギャップを感じましたが、そもそも私がAに感じた人懐こさは、相手を拒否しないこと、何にでもよく笑ったり、逆に表情をつくって大人を笑わせたりすることから感じていたものでした。また、日中、園で過ごしている時は、私が声をかければ必ずと言っていいほど笑顔を見せてくれるのに、母親が迎えに来るとすぐに抱っこで甘え、その時に私に出会っても顔すら見せてくれないことがしばしばでした。園では自分らしさを出せてないのではないかと感じました。

まだAと私は出会ったばかり。Aとの関係を丁寧に築き、AがAらしく園でも過ごせるようにと、Aが「こうしたい」と言ってくれた時には、Aが私に伝えてきてくれたことを大切にするように努めました。また、Aからスキンシップを求めることはほとんどなかったため、スキンシップを意識的にとるようになり心がけていました。

しばらくして、Aは育児の場面で甘えることが目立つようになりました。Aが今までできていたことを拒否し、「できない」と言うようになったのです。私は、Aの気持ちをそのまま受け止めていいものかどうか葛藤がありました。まずはAの思いを受け止めようと心に決め、Aが「できない」と言った時には、「そうなの、じゃ、先生手伝ってもいい？」と尋ね、着脱なり、手洗いなり、その手をふくこととなり、私が全面的に介助をしていました。

次第に、Aが自分から「抱っこ」と私に要求したり、ふと私のひざに乗ったり、思い通りにできないことがあると泣き、私に抱っこを求める姿が見られるようになります。Aが少しずつ私に心を許してくれているように感じ、うれしくなりました。しかし、育児の場面での甘えがエスカレートしているように感じ、つい「やってみよう」とAに求めてしまうこともありました。私の在り方に一貫性がないことは認めますが、それでもAの思いを受け止めようと思いついたのは、Aが私に少しずつ心を許してくれているように感じたAの姿があったからこそです。

お盆休み明けに、Aに変化が見えてきました。育児の場面での甘えが強く感じられなくなってきました。食事の進みがよくなったり、少しずつですが、着脱にも意欲が見られたりするようになりました。家庭で父親と一緒に歌っている歌を、園でも熱唱する姿が見られ、Aの中で家庭と園のつながりができ

てきたように感じました。また、自分より小さい子に対して靴を履くのを手伝い、それを誇らしそうにする姿なども見られてきました。

おむつを選び始めるーさまざまなおむつ方

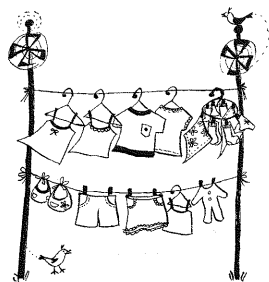
このように、Aが自分らしく園でも過ごせ、自信がついてきたと少しずつ感じられるようになってきました。しばらくすると、それまでおむつを取り替えるときには私が取り出していたのですが、Aが「おむつを選ぶ」ということを始めたのです。

はじめは、Aが「○○（買ってきた場所）のおむつがいい」と言ったことです（私の勤務している園では、おむつは個人で用意しています）。私は、それまで用意されていなかった新しいシリーズの柄のおむつだろうと思いい、そのおむつを取り出しました。やりとりが続く中で、Aはそのシリーズの中で

も、ある一つの柄（リングがついてるやつ）がよいのだということがわかりました。しかし、一日のうちにその

柄のおむつがなくなってしまうことがあり、私はそのことを伝えたくて、Aに用意されているおむつをすべて出して見せました。「ね、リングがついているのなんでしょう。この中だったらどれがいい？」と言って、Aにおむつを選んでもらったのです。

選び方は次第にいろいろな方法が出てきます。自分のおむつの入っている引き出しをあけて、その中から「1、2、3…」と数を数えて、「2階！」などと言って選ぶこともありました。Aはマンションに住んでいるためか、数字にとっても興味があります。



「住んでいる階について）Aくん6、Rくん（同じマンションに住んでいる他クラスの子）2」と言ったり、6階に住んでいることから「6」の文字を見つけると「Aくんの6」と言ったりします。積み木を積んでエレベーターやマンションを作ることでも好きで、作っては「ここが○階」と言うこともあります。

数だけで選ぶこともありました。「1、2、3、…11！」と言いながらおむつをなぞり、最後に引き抜くのです。そんな話をAの父親にすると、「お風呂で数えているからですかねえ…」と話します。選ぶ方もきつとAの楽しかった体験や興味のあることとつながっているのだと感じます。

新しくイヌの絵柄シリーズのおむつが用意されると、Aは「わんわんのおむつがいい」と言いました。「わんわんのおむつ」を選び始めて数日、私に

「わんわんのおむつ」を二つ差し出して「どれにしようかってして」とAは言いました。私の記憶ではAとそのようなことをした覚えがありませんでしたが、「どれにしようかな てんのかみさまのゆうとおり なのなのな」と指を交互にさして「こっち」と私が決めました。すると、Aはうれしそうな表情で「こっち」と私が選んだものと反対のものを選び取りました。

私にとつて、このことはとても衝撃的で、かつうれい出来事でした。Aが偶然的なやり方にしろ私に選ばせておいて、それでいて私とは違うものを選び取ることは、いったい何を意味しているのでしょうか。このような場面の中で、Aは私（大人）の意見とは違う選択肢もあり、それを選び取ることで、主張することを体験的に積み上げているのでしょうか。

私の決定がすべてではないことをAがこのような

形でも表現してくれていることで、Aが頼もしく思え、私はうれしくなったのです。

Aが「先生選んで」「どれにしようかな、して」「ねえ、うたって」と私に選ばせるのはどんなときだろうと考えてみます。はじめは自分の好きな柄のおむつがないときのように感じられました。もちろんそういうときもありますが、常にそうとは思えませんでした。Aの中では、すでに決まっているのに、私に選ばせるときもあるし、単に私との一対一のやりとりを楽しんでいるのではないかとも思います。

最近では私が「どれにしようかな」を歌い終わって決めたものとは、違うものを取って「こっちだったねえ」と言ったりします。「どうして？」と一回だけ尋ねてみたこともあります。Aの様子からはその理由がよくわかりませんでした。また、一回だけですが、私と同じものを選ぶこともありましたがこのやりとりを続けている理由ははっきりとはわ

かりませんが、Aが選ぶのなら、Aとのやりとりにつき合い、その成り行きを見守り、Aにとつての意味を考え続けていきたいと思っています。

話はトイレでの排尿の話に移ります。Aは家庭でトイレに行くこともあると聞いていましたので、少しずつ園のトイレに慣れてほしいと思い、誘うことはありましたが、ほとんど拒否されました。しかし、私が休んでいる間にAがトイレに行くようになりました。私は休み明けの出勤でその話を聞いてうれしく思い、Aをトイレに誘いますが、私とは、トイレではなく、おむつ交換台のある所に行き、おむつを選ぶことを期待しているようでした。それでも、私とも徐々にトイレに行くようになり、今度はズボンや上着などの洋服を選ぶこともするようになったのです。現在、Aはトイレに行きたがらない日もあります。そんなときは無理せずにおむつ交換台でおむつを替えるようにしています。

おむつを替える場面から思いを馳せる

おむつを替える場面と重なるAの姿は、ほかの場面でも見られます。たとえば、私がおやつや食事に誘おうとすると、Aは必ず陰に隠れて、「ばあー」と私を驚かせます。また、園庭で過ごしている時に、Aは私に積極的に「先生一緒に遊ぼう」と言うのです。Aが私とのやりとり、特におむつ交換やおやつや食事に誘う場面では、決まりきったやりとりを期待しているようなのです。その一方で、Aに「一緒に遊ぼう」「一緒に行く」と誘われても私が応えられない時に、なかなかA一人では自分の行きたい場所に向かえないことがあります。私はこのような場面に行くわすと、願いとしてはAが行きたいと思う場所へ一人でも行くことができました、と思うのです。Aに自分のやりたいことを人と楽しむことももちろん、一人でもそれに向かっていけるような自信

をもつけていってほしいと願っています。

Aが私とおむつを選ぶということを始めてから、この原稿を書いている二月まで、Aが必ず選んでいるということはありません。しかし、それを続けていることには、確かに意味があります。同じやりとりでの安心感、自分がしていることを認めてもらうことを通して、次のステップへ向かう心の栄養の充足期間なのかもしれません。日常的で些細なことだからこそ、その人にとって何か大切なことが含まれているような気がしてなりません。

しかし、私が興味をそそられたAのおむつを選ぶ場面。Aは大人の期待を敏感に感じ取ってしまうところがありますので、Aがこのやりとりを私のためにするのではないように、私の心もちに気をつけたいと気を引き締める今日このごろです。そして今後の展開が楽しみです。